

道風

道風記念館だより

第55号

発行日
令和二年五月三十一日

編集・発行

春日井市道風記念館

春日井市松河戸町五―九―三

電話（〇五六八）八二―六一一〇

― 収蔵品紹介 大聖武（伝聖武）天皇筆賢愚経断簡 ―

賢愚経とは、北魏の慧覺らが訳した經典で、賢者・愚者についての六十九編の仏教説話が収められています。この断簡は賢愚経卷六、盲目の老僧のために自らの両眼をくりぬいて与えたという快目王の説話の一部分です。

大きく太い文字で堂々とした書きぶりです。通常の經典は一行に十七字書かれています。この断簡は十二字、他の大聖武の断簡をみると九字から十五字と一定していません。

大和国の東大寺に伝来していたので「大和切」とも呼ばれます。東大寺を建立した聖武天皇の宸

筆と伝えられていますが、聖武天皇の真筆である「雑集」とは明らかに別筆です。実際の筆者については、唐で書かれたものを輸入したという説、唐からの帰化人が日本で書いたという説、唐の写経を学んだ日本の写経生が書いたという説があり、いまだ定説を見ません。

料紙をよく見ると一面に細かい点があるのがわかります。光明皇后が亡くなったあと、皇后を茶毘に付して遺骨を細かく砕き、それを漉き込んだ紙を作らせ、聖武天皇が皇后の冥福を祈って手ずからこの写経をされたという伝説があります。そ

所至行人答曰汝不知耶如来
出世此難值過今在此國敷演

所至行人答曰汝不知耶如来 出世此難值過今在此國敷演



のため、この料紙は「茶毘紙」と呼ばれ、大聖武は「茶毘紙切」「お骨切」などとも呼ばれています。実際には香木の粉末が漉き込まれた紙です。また、聖武天皇は光明皇后より四年早く亡くなっているため、このようなことはあり得ません。

茶毘紙に書かれた写経で中くらいの大きさの字で書かれたもの、小さい字で書かれたものがあり、「中聖武」、「小聖武」と呼ばれています。大聖武、中聖武、小聖武はそれぞれ別筆ですが、書風は似通っています。

近世になると、茶道の流行にともなって古筆の鑑賞が盛んになります。裕福な人々は競って古筆を収集し、古筆を貼り込んだ「手鑑」を作りました。手鑑の巻頭には大聖武を貼るのが決まりだったので、大聖武は需要が多く、次第に細断されていったようです。一行だけの断簡も珍しくありません。

中国古代の簡牘 1 竹簡と木簡

福田 哲之

はじめまして、福田哲之と申します。私は中国文字学・書道史を専門とし、中国古代の遺跡や墳墓から出土する文字資料を中心に研究しています。二十世紀以降、中国では戦国（紀元前四〇三〜紀元前二二二）から晋（二六五〜四一九）までのおよそ八〇〇年にわたる時代の竹簡や木簡が大量に出土し、多くの新たな知見が提供されました。二十一世紀に入ってから、資料数は増加の一途をたどっており、中国古代に関する研究は、画期的な進展を遂げています。

この連載では、最新の情報もまじえながら、中国古代の簡牘について、お話ししたいと思います。

近年では、竹簡・木簡を合わせた簡牘という名称も定着してきましたが、わが国では木簡という呼び方が広く行われてきています。ただし、わが国における「木簡」の意味は多義的で、時には竹簡を含めた総称として用いられる場合もあります。たしかに竹簡と木簡とは共通点もありますが、両者は本来、材質の違いに応じた異なる用途や性格をもっていました。

そこで第一回は、書写材料と用途という視点から、先行研究を踏まえて、竹簡と木簡との違いを確認しておきましょう。

まずは竹簡です。竹簡の用途は、多くの字数を必要とする書物や簿籍の書写にほぼ限定され、紙

が普及する以前は、竹簡が書写材料の中心的な位置を占めていました。

出土した竹簡を見ると、一簡の長さは一五センチ程度から五〇センチを超えるものまでさまざまですが、一簡の幅は八ミリ前後、厚さは一ミリ弱で、薄く細長いふだという基本的な形状は共通しています。

竹簡は原則として各簡の片面に一行で書写され、それを右から順に並べて、横糸で上・下の二箇所または上・中・下の三箇所を綴じました（図1）。簡の数を増やせば、どんなに字数が多くても対応できるわけです。

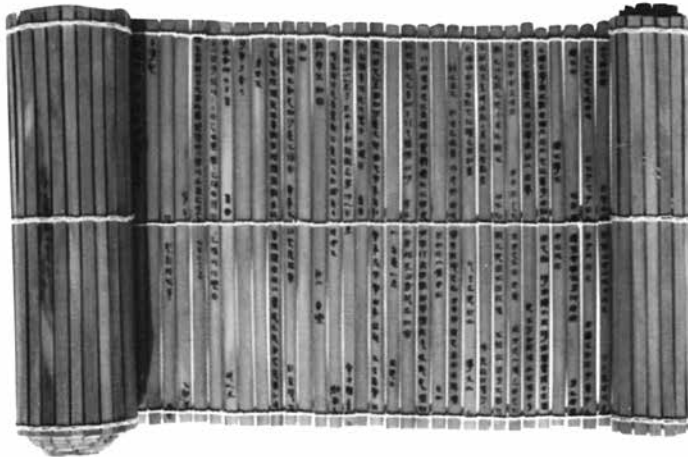


図1 竹簡を編綴した書物（複製）

竹簡の材料となる平べったい「平竹ひご」を思い浮かべていただければおわかりのように、竹は薄く削いで細長く加工することができ、大量生産が可能で、数量が多くなっても軽量です。このように竹簡は、複数の簡を編綴して使用することを前提とした書写材料であり、簡の用途・形状、竹という素材との間には、竹でなければならぬ必然性が存在しているのです。

次は木簡です。竹簡がほぼ単一の用途と形状を特色とするのに対して、木簡は多様な用途とそれに応じたさまざまな形状を特色とし、それぞれに固有の名称がつけられています。以下にその一部を挙げてみましょう。

- ① 簡……字数の多い書物や簿籍などの書写に用いた。竹簡と同様、複数の薄く削った細長いふだを横に並べて編綴した。原則として片面に一行で書写されている。
- ② 牘……一枚で完結する文書や手紙などの書写に用いた。幅の狭い「簡」に対して幅の広い木の板を「牘」という。幅は一センチ余りものから一〇センチにおよぶものまで一定しないものが多く、原則として両面に複数行で書写されている（図2）。
- ③ 觚……一本で完結する文書などの書写に用いた。三面以上の多面柱の形状をもつ。
- ④ 檢……文書などを送付する際の封緘に用いた。粘土をつめて封印するための封泥匣と呼ばれる凹みをもつ（図3）。
- ⑤ 梟……付け札や荷札に用いた。上下に紐で結ぶ



図2 牘



図3 楯

図4 楬

ための切り込みを入れたものや、上部を丸くし、斜めの格子模様などを描いて紐を通す穴をあけたものなどがある(図4)。

これらのうち文字書写を第一義とする点で、①簡と②牘・③觚とは用途が共通します。しかし、①が複数の編綴を前提とするのに対して、②・③は一枚あるいは一本の単独で使用されるという相違点を持ち、それが幅の広さや多面柱といった形状と結びついています。

一方、④検・⑤楬も単独で使用されますが、②牘・③觚と異なるのは、文字書写を第一義とせず、封緘や付け札といった別の用途を併せもっている点です。それが封泥匣や切り込みといった形状と結びついています。

このように②・⑤は、(一)単独で使用される、(二)竹では加工が難しい独自の形状をもつ、という共通の性格を持ち、ここに木でなければならぬ素材としての必然性が存在するのです。

これに対して例外が①簡です。先にも述べたように薄く削いだ細長い簡は、竹に適しており、木材をこのような形状に加工し、量産することは、かなり手間のかかる作業だったはずですが、それに

もかわらず木製の簡が作られたのはなぜでしょうか。

その最大の理由は、竹が生育しない中国の西北部などの地域において、竹の代用品として木が用いられたことです。つまり木製の簡は決して竹簡と同等に併存していたわけではなく、あくまでも例外的な存在だったのです。

ここであらためてわが国で使用されている「木簡」という語の意味について、まとめておきましょう。「木簡」は、狭義には①の木製の簡を指し、広義には①〜⑤などすべての木製の書写材料を指して用いられます。さらに先に述べたように、竹簡を含めた総称として用いられることもあり、わが国において「木簡」の語がこのような多義化した背景として、二つの要因が指摘されています。

第一の要因は、二十世紀の前半に初めて中国西部の辺境地帯から漢・晋時代の簡牘が出土した際、その大部分が木簡だったことです。これらは主として匈奴防衛のための軍事施設から出土したもので、行政文書に用いられることの多い②牘や、文書の運搬に用いる④検・⑤楬などが多く含まれ

ており、しかも竹が生育しない地域であったため、本来、竹で作られる簡も木製のものが使用されました。

第二の要因は、平城宮跡などの奈良時代の遺跡から木簡が出土したことです。ただしその大部分は、⑤楬のような文字書写を第一義としない用途の木簡でした。正倉院文書に代表されるように、奈良時代はすでに紙が書写材料の中心的な位置を占めていましたが、紙が普及した後も、紙では代用できない付け札などには、依然として木簡が使用されていました。

これら二つの要因の相乗作用により、わが国では古代の書写材料として木簡が強く印象づけられ、その結果「木簡」の語が、あたかも簡牘資料の代名詞のように用いられることになったのです。

(高根大学教授 ふくだ・てつゆき)

図版出典

- 図1 銀雀山漢墓竹簡博物館「竹簡書仿真品説明書」
- 図2 『簡牘名蹟選1』二玄社、二〇〇九年
- 図3・図4 『小学之道 従漢簡看漢代識字教育』、中央研究院歴史語言研究所、二〇一三年

令和元年度 事業報告

展覧会

改元記念企画展「近現代の書【昭和・平成編】」

4月24日～7月15日

- ・平成から令和への改元の節目に、近現代の書を振り返る。第1期の明治・大正編につづき、第2期として昭和・平成の書を展示。
- ・学芸員による展示品解説（5月12日、6月2日）

企画展「おののとうふう～小野一族のひみつ～」

7月19日～9月1日

- ・子どもにもわかりやすく小野道風を紹介。
- ・ワークショップ「はじめてのふで」「秘密の特訓」「道風くんにチャレンジ!」を実施。

特別展「川谷尚亭～神々しきその書～」

9月6日～10月14日

- ・46歳という若さでこの世を去りつつも、現代の書に大きな影響を与えた書家、川谷尚亭の代表作を展示。
- ・ギャラリートーク 吉野大巨氏（9月8日）
- ・学芸員による展示品解説（9月21日）
- ・講演会「川谷尚亭の書」 桑原呂翁氏（10月5日）

企画展「黒野清宇の書」

10月18日～11月4日

- ・日本を代表する仮名書家として活躍した黒野清宇の書を紹介。

- ・ギャラリートーク 村瀬俊彦氏（10月20日）

館藏品展「書の魅力」

11月7日～2月2日

- ・様々な魅力をもつ館蔵の書作品を展示。あえて読まない鑑賞法を提案。
- ・学芸員による展示品解説（12月1日、12月15日）

館藏品展「読んで味わう書の世界」

2月5日～4月19日

- ・館藏品のうち、書かれている内容を知ることにより楽しめる作品を展示。
- ・学芸員による展示品解説（2月16日）

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、会期中で中止。

2階展示室の展覧会

「第84回県下児童・生徒席上揮毫大会作品展」

12月20日～1月5日

「第38回道風の書臨書作品展」

1月10日～19日

講座

「篆書・隸書の臨書」5月～6月

- ・全6回を2クラス実施。講師 中村立強氏

令和2年度 スケジュール（前期）

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
		<p>館藏品展「つづけ書きの妙」 6月2日～7月12日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書表現のうち連綿に焦点をあてた展覧会。館藏品の中から連綿の美しい作品を展示し、その魅力を紹介する。 						
			<p>企画展「おののとうふう～和様の書のうつりかわり～」 7月17日～8月30日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもにもわかりやすく小野道風を紹介。和様の書の平安時代以降の変遷をたどることで、道風の偉大さを知る。 ・ワークショップ「はじめてのふで」「秘密の特訓」を実施。 					
						<p>館藏品展「書の魅力」 9月4日～11月29日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書の様々な魅力を紹介し、鑑賞方法を提案する展覧会。 		
<p>展覧会</p> <p>講座</p>						<p>「臨書講座」 9月～10月 全4回</p>		
<p>常設展示</p>	<p>小野道風をはじめとする平安時代の書について</p>							